〈6〉簡易磁気刺激療法の腹圧性ならびに切迫性尿失禁に対する治療効果の検討

西松　寛明

東京大学大学院医学系研究科泌尿器外科学

【目的】仙骨神経領域に対する磁気刺激療法は非侵襲的な体外的神経刺激が可能である。今回我々は家庭でも使用可能な磁気パッドを開発し、実際に磁気刺激が生じないsham stimulatorも用意し、本治療法の有効性を評価した。

【対象および方法】切迫性または腹圧性尿失禁と診断された未治療の女性21例(有効例12例、平均年齢63.9±8.8歳、磁気刺激群：7例、sham群：5例)。誕生日の偶数奇数でActive(磁場：65mT)，Sham(磁場：3 mT)を割り当てた。1回の治療時間を20分間として1日あたり3回、2週間実施した。東京大学倫理委員会で認められた以下の項目、1. 排尿日誌による排尿状態の変化(排尿回数・量、尿失禁回数)、QOLスコアー。2. 尿流動態・神経生理学的検査(ウロフローメトリー、残尿測定、膀胱内圧測定)。3. パッドテストの各項目を実施した。

【結果】Active群では、排尿回数、パッドテスト、残尿量、1日あたりのパッド交換回数、QOLの各項目で治療後による改善効果を認めた。Sham群では、治療の前後でのいずれの項目でも改善を認めなかった。また両群の比較では、治療により失禁回数、1回排尿量、ウロフローメトリー、初発尿意、leak point pressure の5項目で改善効果を認めた。排尿手帳による経時的な観察では、失禁回数や一回排尿量は、治療開始後7日目以降有意に改善する傾向を認めた。

【考察】本治療器は、以前我々が報告してきた磁気治療に比較して発生磁場は弱いが、sham群に比べて排尿パラメーターが有意に改善しており、65mTの磁場でも繰り返し仙骨神経を刺激することによって治療効果を確認できた。またこのため効果発現には約一週間の治療期間を要するが、在宅で治療することによってその有効性が示唆された。